

崇徳会研究・研修センター便り第7号「認知症学術集会に参加した感想」

田宮病院 地域生活支援室 松永優那

本学会に参加し、最新の研究動向と多職種による実践報告に触れることができ、非常に学びの多い時間となった。特に、認知症の早期診断をめぐるバイオマーカー研究に関する発表が多く、血液バイオマーカーや画像技術の進歩により、これまで以上に早期の段階で病態を捉えられる可能性が広がっていることを実感した。医学的知見が進む一方で、その成果を地域支援へどのようにつなげていくかという視点が、地域支援に携わる精神保健福祉士にとってますます重要になると感じた。

一方で、学会全体を通してみると、コメディカルによる実践報告は多くはなく、医療モデルに基づく発表が中心であった。しかし、だからこそ精神保健福祉士が発信する生活者としての視点の価値を改めて感じた。認知症支援は、医学的診断や治療だけで完結するものではなく、本人の生活歴、家族背景、地域資源とのつながりを含めた多面的な支援が不可欠であるため、精神保健福祉士による支援も認知症支援を支える大きな柱であると再確認した。

私は今回「認知症患者における家族支援から見えたこと～療養生活継続支援加算、精神科訪問看護・指導料を導入した一例～」をテーマに発表を行った。退院後の地域生活が途切れないよう、入院中からサービス調整を行い、本人や家族、地域支援者の不安軽減となるよう面談をし、地域での生活継続につなげた事例を紹介した。医療モデルの発表が多い中ではあったが、「退院支援の流れが具体的で参考になった」「私たちも頑張ります」等の意見をいただき、精神保健福祉士としての発表に意義があったと強く感じ、大きな自信と今後の励みになった。

発表準備の過程では、約半年にわたり内容の練り直しを続け、思うようにまとまらず諦めかけた時期もあった。しかし、多くの同僚や多職種の方々から助言や励ましをいただき、最終的に納得のいく形で発表することができた。今回の経験は、私一人の力ではなく、周囲の支えにより実現したものであり、改めて深く感謝している。

今回の学会参加と発表を通して、精神保健福祉士としての専門性を発信する意義を再認識するとともに、今後も学会という場に積極的に挑戦し、他の医療機関との意見交換を通じて、自身の実践をさらに磨いていきたいと強く感じている。得られた学びを日々の退院支援や多職種連携に生かし、認知症の方が住み慣れた地域で安心して暮らし続けられる支援の充実に引き続き努めていきたい。